

医療法人如水会 四日市腎クリニック¹⁾、医療法人如水会 鈴鹿腎クリニック²⁾

○吉見美穂子¹⁾、村林麻子¹⁾、出岡悦子¹⁾、小林 薫¹⁾、伊藤英明子²⁾、岩島重二郎²⁾
伊藤 豊¹⁾、河出泰雅²⁾、河出芳助²⁾

【はじめに】透析患者の高齢化に伴い、老衰による終末期を迎える患者が増加している。

終末期における看護は「最期までその人らしく」という考えが基本にあるという。

今回、認知機能低下のない超高齢患者の終末期を経験したので報告する。

【症例】平成22年10月、腎硬化症にて95歳で血液透析導入された男性。

肺炎や腰椎圧迫骨折などで入退院を繰り返し、ADLは車椅子移動であった。

家族からは介護負担、最後の看取りに立ち会うのが不安という気持ちから入院希望があったが、

本人は「家に居たい、家が1番いい。」と普段から言っており、訪問看護やヘルパーの力を借りていた。

平成25年12月、誤嚥性肺炎を発症した。入院した場合、在院死の可能性があると考えられた。当初は入院希望していた家族から『自宅で看たい、本人の気持ちを大事にしたい。』という声が出てきたが、結果として他院入院の3日後に98歳で永眠された。

【考察】「最期までその人らしく」を基本とした看護を考え、患者本人が希望した自宅療養の方向性で看取ることができず入院の運びとなった。

常時、入院希望のあった家族と度重なる面談をしたが、介護負担・看取りの不安をうまく改善できず、本人の希望に添うことができなかった。

今後は在宅医療を行っている病院、ケアマネジャーとの連携を密にし、終末期の患者に対しては、本人や家族の希望を尊重しつつ、看護できるようにしていきたい。

地方独立行政法人 堺市立病院機構 市立堺病院

○田中順也

【目的】透析継続が困難となった患者家族の「透析継続を見合わせる」という代理意思決定を支える援助を行った。その援助を振り返り、慢性疾患看護専門看護師(以下、専門看護師)が行った代理意思決定支援を明らかにする。

【方法】事例研究。1. 対象：A氏、80歳代女性。軽度認知症があったが、本人の強い希望で透析導入。その後、認知症が増強し透析継続が困難となった。2. データ収集と分析：診療録から専門看護師が行った代理意思決定を支える援助内容を抽出し分析した。3. 研究期間：平成25年12月～平成26年3月。4. 倫理的配慮：個人が特定されないなどの配慮を行い、患者本人・家族の了解を得て研究を行った。

【結果】維持透析見合わせの決断への援助として、以下の支援を行った。1. 患者の認知レベルと全身状態の再評

価、2. 患者・家族の治療への理解の確認、3. 決断に向けた話し合いの調整と揺らぐ思いに寄り添う、4. 医師、スタッフと連携し患者の安楽を確保、5. 穏やかな最期の時間の調整をした。その結果、家族は、「これで良かったかどうかはわかりませんが、A氏も私たち家族も納得しています」と話された。

【考察】「維持透析見合わせ」という家族の代理意思決定を支えるためには、患者の人生や価値観を振り返りながら、医療者としての専門的知識を發揮し、医療者と家族が何度も話し合う場を持ち、家族の揺らぐ気持ちや感情に寄り添うことが重要である。

“食べる喜び”が見出せた 終末期を迎えた入院透析患者・家族との関わり

みやぎ清耀会 緑の里クリニック

○佐々木 涼、高橋美代子、叶 諒子、阿部加奈子、江刺佑佳、宍戸 洋

【緒言】 “食べる”ことは人が生きていくための原点である。当院では透析患者に対し温かくて美味しい食事を透析中に提供し五感で楽しめるよう工夫してきた。しかし、終末期に至ると経口摂取も困難になる。これまで取り組んできた旅立ち前の患者への食の工夫－最期の晩餐－の実際と栄養士と患者・家族、さらには調理師・看護師との関わりについて報告する。

【症例】 91歳女性

透析歴1.4年

大腿骨頸部骨折・肺結核等により寝たきり状態にて当院へ転入院

【経過】 入院時は食欲不振のため全粥食を提供したが好みに合わず数口のみ摂取。主治医の指示で患者の希望する“みそおにぎり”を提供したところ喫食量が増え食欲が

出てきた。その後“やせ”で義歯が合わず通常食の摂取が困難となった。そこで、麺類や好物の漬物を提供し噛まらずに出してもらう等の工夫をした。看護師・調理師からは嗜好による個別対応に戸惑いや疑問の声があったが、患者は“食べる喜び”を感じ元気を取り戻していった。亡くなる直前までささやかながらも経口摂取を継続でき、その結果スタッフからの否定的な評価は肯定的なものへ変化した。

【考按】 終末期を迎えた患者への食事提供では患者が食べる喜びを感じられるようにすることが大切である。それは患者・家族－スタッフ間の信頼関係があってこそ成り立つのもであろう。今後も「生」の原動力である「食」が喜びとなるよう関わっていききたい。

高齢者の透析導入に伴う問題点と検討 ～一症例を通して考える～

みやぎ清耀会 緑の里クリニック

○水野千恵子、日野やよい、熱海玲子、平沼聡史、石田亜希、宍戸 洋

【緒言】 近年透析患者の高齢化が進んでいる。高齢独居者の透析導入例の経過を病棟看護師の立場から考察し報告する。

【症例】 84歳男性・独居・要介護4・伝い歩き・オムツ使用。昭和49年糖尿病指摘。平成23年頃より血清Crが高値となり内シャント造設。平成25年12月に透析導入。認知力低下のため病識は不十分で意志確認は困難であったが、家族の強い希望により導入となった。透析に対する拒否の言動はなく通常通りオリエンテーションを行ったが、どの程度理解できたかは曖昧であった。導入後も家族の同居は困難であり、①認知力低下での独居②家族の介護力不足③通院手段など問題が多かった。家族・介護支援者等との話し合いを重ね、病棟・透析室のカンファレンスを行い、なんとか退院にこぎつけた。

【考察】 春木は高齢者に対する心構えとして『それぞれの高齢者の生き方、在り方を尊重する態度、無理に変えようとしない、本人よりも環境、周りの人々を調整する考え方が大事』であると述べている。高齢者にとって環境の変化は様々な負の影響をもたらす。また患者が望む事は単なる延命ではなく「今の生活を維持する事」ではないかと思ひ、今回は独居生活を続ける事が出来るよう支援した。一方、非導入の決断も尊重され「看取り」の仕事も大切であると考え。患者、家族、スタッフ皆で悩みながら、患者にとって「何が幸せか」を考えて行きたい。

超高齢患者の「透析見合わせ」までの意思決定プロセスを振り返る

(株)日立製作所日立総合病院 透析室¹⁾、(株)日立製作所日立総合病院 腎臓内科²⁾
 ○齊藤ひろみ¹⁾、関根理恵¹⁾、大平裕子¹⁾、角田亮也²⁾、岩瀬茉未子²⁾、植田敦志²⁾

認知機能低下を伴う86歳超高齢女性患者に対し、血液透析開始から継続見合わせまでの過程を経験したため、意思決定プロセスを振り返り報告する。

入院前の患者は、要介護1であり訪問診療やデイサービスを利用して夫と二人で暮らしていた。慢性腎不全急性増悪で入院後よりせん妄が出現し、血液透析開始の意思決定は患者および家族に情報提供し同意を得た。治療は、長期留置型透析カテーテルのトラブルや内シャント作成困難などアクセス経路に難渋し、毎回大腿静脈直接穿刺による苦痛を伴ったうえ、循環動態も不安定であった。さらに、穿刺部の屈曲や透析回路を触るなどの危険行動や、「やめたい」「家に帰りたい」と大声で泣く姿が散見された。せん妄やADL低下は改善せず、診断された認知症も進行する一方であった。そこで、血液透析が患者

にとって苦痛となっており、利益となりにくい状況を家族に説明し、「透析見合わせ」も含め家族で相談していた。治療中に励ましに訪れる家族に、患者は一旦鎮くものすぐに「家に帰りたい」と泣き始める状況は変わらなかった。約1カ月後、家族は「透析見合わせ」の意思決定をした。

少しでも長く生きていてほしいと願う家族にとって、死を決定する「透析見合わせ」は苦渋の決断となる。家族にとって妻や母親の認知症を承認し、「やめたい」という言葉を本意と受けとめ、さまざまな葛藤を解決するまでの時間が必要であると考ええる。

認知症、アルコール依存症のある高齢透析患者が望む通院透析への支援～患者の思い～

(特医)竹下病院 透析室¹⁾、(特医)竹下病院 泌尿器科²⁾、(特医)竹下病院 内科³⁾
 ○岡本真実¹⁾、山中和代¹⁾、入口弘英²⁾、原 郁夫³⁾

【目的】認知症、アルコール依存症のある高齢透析患者の看護支援を振り返り

患者の思いを知る

【症例】86歳男性、認知症のある妻と二人暮らし、子供は居ない

【経過】飲酒による体重増加が目立つようになり、水分管理に重点をおき指導を行う。施設入所勧めるも拒否し自宅で過ごしたいと強い希望があった。飲酒が原因で来院拒否する中で悲観的な言葉が聞かれるようになる。夜中大声で叫ぶ行為が見られるようになり精神科受診した翌朝自宅で永眠される。

【結果】ケアマネジャーと連携し日常の情報を共有しながら、指導内容は単純化したことで水分管理はできるようになった。再三の看護師による迎えは限界があったため

ヘルパーによる朝の送りだしを依頼し安否確認が可能となり、連絡ノート活用で変化の早期発見に役立てることができた。無理な説得はせず気持ちを尊重したことで患者が望む通院透析が継続できた。

【考察】自分の事は自分でという強い意志があり、気持ちを尊重し信じ見守ることでその人らしく生活していくための支援につながったと考える。入院だけはしたくないという思いを支えながら社会資源を活用し連携したことで患者が望む生活が継続できたと考える。妻には相談もできず一人で悩んでいたと思われ、認知症もあり本当の気持ちは理解することはできなかった。

【結語】チームで情報を共有したことで思いや気持ちを知りきっかけにつながったと考える。